第4回日本伝道会議・沖縄宣言

「21世紀の日本を担う教会の伝道－和解の福音を共に生きる－」

第三章　和解の福音を共に生きる―この所で

私たちが和解の福音を共に生きるのは、家庭、教会、地域社会といった具体的な生活の場です。同時に、それは日本全体、世界全体を視野に入れたものです。

1.家庭において

神のかたちに造られた私たちは、孤独に生きるものではなく、家庭において家族と共に生きるものとされています。しかし人間の罪は、愛し合い、共に生きるべき家族関係を破壊しています。夫婦間の不和、不倫、離婚、幼児虐待、家庭内暴力、未成年者の非行などに見られるように、家庭が安息の場ではなく苦しみに満ちたところとなっています。家庭が和解の福音によって再生される必要を痛感します。

家庭における和解は、自らが夫や妻として、親や子として、兄や弟、姉や妹として、豊かな人間関係の中で生きることができるよう神により頼み、仕え合うことから始まります。自らの問題と真剣に取り組んでいくとき、同じ悩みを持つ人々との交わりが生まれます。教会は交わりと分かち合いやカウンセリングの場を提供することによって、また聖書的な家庭像を提示することによって、家庭の再生を助けることができるように主にある成長が必要です。クリスチャン・ホームに神の平和が実現し、教会が家庭の問題で苦しむ人々の重荷を受け止められるように成長したとき、伝道も前進すると確信します。

これまで家族伝道は必ずしも成功しませんでした。私たちは、「罪を赦された不完全な人間である」ことを認め、それぞれの家族をあるがままに受容し愛し続け、和解の使者として用いられることを願います。家族における一人の救いは、家族共同体の救いを可能にすることを確信し、忍耐をもって祈り続けます。

2.教会において

キリストの救いにあずかった私たちは、愛をもって仕え合う共同体を形成します。この教会は、三位一体の神を証しし、キリストの福音を明らかにするもので、憎悪や差別、対立や紛争によって損なわれた社会に対して、和解の共同体として仕えていきます。

しかしながら、この点についても反省すべきことがあります。教会内の対立や分裂は、福音の真理への熱心さのゆえばかりではなく、肉の弱さの現れでもありました。私たちは、分離することで自らの信念を保とうとし、本質的でないことがらへの執着や、異なる考え方に対する過剰な警戒心によって、交わりを損なってきました。私たちはこのことを悔い改め、聖書を土台とする教会の一致を求めていきます。すでに各地域においては、放送伝道、協力伝道、市民クリスマス、牧師会、朝祷会、災害における相互の助け合いなど、一致の動きがあり、今後さらに一致の実現に向けて励みます。

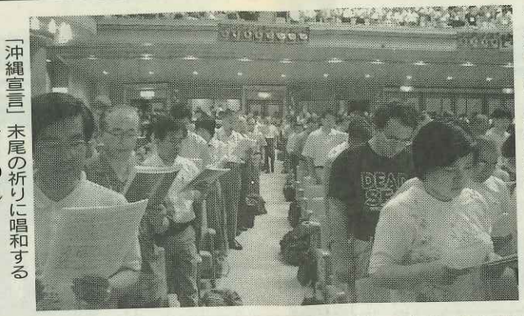
今日における聖霊の働きに対する理解の違いが、交わりに亀裂を生じさせ、互いを傷つけてきたことは悲しむべき現実です。私たちはそれぞれの相違を認めつつ、主にある交わりを回復するために努力していきます。

教会の不一致は、教団、教派、教会間だけではなく、しばしば地域教会の中にもありました。教会員同士、教職者同士、教職者と教会員、男性会員と女性会員、年長者と若年者が互いに仕え合うことにより、和解の福音の豊かさを証ししていきます。

教会の一体性は、教会と超教派諸団体との間、また超教派諸団体相互の間にも求められます。閉鎖性や他を顧みない態度を捨て、互いに納得できるルールを設定し、積極的な協力関係を築くことを目指します。私たちは、各年齢層に対する伝道、メディア伝道、社会正義実現のための働き、キリスト教世界観に基づく学校教育、教職者の養成、信徒の育成、キリスト教文化の創造などに向けて励みます。

また、多くの犠牲を払って日本で働く宣教師と日本の教会・キリスト者との間にも、主にある一致を深めていきます。日本の伝道は宣教師の働きによって開かれてきました。この歴史的恩恵に感謝するとともに、日本が依然として「宣教地」であることを覚え、私たちは海外からの宣教師と共に労することを喜びとします。

過去の伝道会議においても確認されたように、私たちは公同の教会を意識し、アジアと世界の教会との交わりを深めてきました。しかし、グローバル化の進むこの時代にあって、私たちはそれぞれの独自性を保ちつつも、これまで以上に世界の諸教会や宣教団体と共に考え、祈り、協力することが求められていることを自覚します。（つづく）



「沖縄宣言」末尾の祈りに唱和する参加者たち（6月30日）

ろんせつ ＜論説＞

論説委員　岡村又男

青少年犯罪の叫びに答える

過激な青少年犯罪や家庭内の悲劇的な叫びは日本ばかりでなく、イギリスにおいても青少年の問題行動がこの十年で五倍になったと言われている。十代の妊娠や麻薬も社会問題になっている。その問題の叫びに答えようとする相談機関も設けられ、専門的な研究、予防と啓発のための活躍がなされているという。

身近なところに問題が

非行化の土壌の一つは、家庭において基本的な秩序感覚やモラル、社会性が育っていないという現実にある。両親の不仲などのかっとうがあり、人間的な温かな接触を失い、子どもを放任して心の成長に関心を払わないという現状。また、子どもへの過剰保護、過剰干渉、過剰期待など、成長していく子どもへの人格的な接触や、自立を求めていく存在であることを無視した子ども教育が少なくないのではないか。

朝食抜きで学校へ行く子どもが多いという。調査によると、非行少年の食生活の貧しさは際だっていると言われている。家族と食事を共にすることがない。飽食、グルメの時代と言われていながら、単に空腹を満たすだけであり、腹は満ちても心が豊かになる食事ではない。家庭で家族と共にする食生活の健全化が、社会性の基本ではないか。

学校にも、過剰な校則、覇気のない教師の授業など問題はある。しかし、遅刻、授業中のおしゃべりやふざけっこ、ちゃんと授業を聞いているしつけから始まるのであり、人間的な温かな接触や、自立を求めていく存在であることを無視した子ども教育が少なくないのではないか。

朝食抜きで学校へ行く子どもが多いという。調査によると、非行少年の食生活の貧しさは際だっていると言われている。家族と食事を共にすることがない。飽食、グルメの時代と言われていながら、単に空腹を満たすだけであり、腹は満ちても心が豊かになる食事ではない。家庭で家族と共にする食生活の健全化が、社会性の基本ではないか。

学校にも、過剰な校則、覇気のない教師の授業など問題はある。しかし、遅刻、授業中のおしゃべりやふざけっこ、ちゃんと授業を聞いているしつけから始まるのであり、人間的な温かな接触や、自立を求めていく存在であることを無視した子ども教育が少なくないのではないか。

朝食抜きで学校へ行く子どもが多いという。調査によると、非行少年の食生活の貧しさは際だっていると言われている。家族と食事を共にすることがない。飽食、グルメの時代と言われていながら、単に空腹を満たすだけであり、腹は満ちても心が豊かになる食事ではない。家庭で家族と共にする食生活の健全化が、社会性の基本ではないか。

学校にも、過剰な校則、覇気のない教師の授業など問題はある。しかし、遅刻、授業中のおしゃべりやふざけっこ、ちゃんと授業を聞いているしつけから始まるのであり、人間的な温かな接触や、自立を求めていく存在であることを無視した子ども教育が少なくないのではないか。

朝食抜きで学校へ行く子どもが多いという。調査によると、非行少年の食生活の貧しさは際だっていると言われている。家族と食事を共にすることがない。飽食、グルメの時代と言われていながら、単に空腹を満たすだけであり、腹は満ちても心が豊かになる食事ではない。家庭で家族と共にする食生活の健全化が、社会性の基本ではないか。

学校にも、過剰な校則、覇気のない教師の授業など問題はある。しかし、遅刻、授業中のおしゃべりやふざけっこ、ちゃんと授業を聞いている職場はないかもしれないし、いやな人間関係があるだろう。しかし、青少年にとって勤労は自立の根幹であるはずだ。非行を犯した少年の多くが無職であり、勤労に適応していないのである。ここにも原因がある。

のがれの町

これらのことで親の責任を責めているのではない。このような家庭問題、子育ての悩み、青少年自身の悩みなど、どこに相談してよいか分からない人々が多くあることは現実である。そのような中で、教会は何ができるか改めて問う必要がないだろうかということである。

もちろんこれは、世にある教会の本来の働きの一つである。しかし、一つの教会、一人の牧師には限界がある。ある宗教に捕らわれた人たちを救出解放するために、専門的な知識をもった教会が窓口になって相談にのってくれ、助けられたことがある。

これらの家庭問題や悩みについての学習を深め、相談に応じられるように、また、相談機関を紹介できるように、横の連携をとる必要はないだろうか。

旧約聖書の中に「のがれの町」が設けられ、重要な役割を果たしていたことが記されている。教会がこれらの問題ののがれの場所として、人々が慰められ癒される場所となり、問題を学習し取り組める場所となることを願うものである。これは、この世におかれている教会の使命でもある。

子どもは家庭の中で秩序感覚を身につけていき、そこから社会のモラル、倫理、マナーを学んでいくものであるが、現実の家庭でそれを学べなくなっている。それが子どもの心の問題、犯罪の問題にかかわっていく一番の基礎であると言える。

もちろん、一つの家庭では処理できない社会的な大きな原因はある。また、この問題の最終根源は、人間の罪の問題であり、「神に対する恐れがない」ところから出ているのである。究極は罪からの救いにあることを覚えながら、教会が身近に問題を抱えている人々の「のがれの場所」として、問題を分かち合えるところ、癒しの場所となり、解決を見いだしていけるところとしての確信をもって対処していきたいと願うものである。

全世界的宣教協力の時代が来た！

「世界宣教セミナー」でチャレンジ

七月十日から十三日まで、東京都奥多摩町の奥多摩福音の家で開かれた「世界宣教セミナー」（アンテオケ宣教会主催）で、講師の安海靖郎氏（同宣教会総主事）は、二十一世紀の世界宣教の課題についてふれ、「今、偉大な宣教の変化の時代を迎えており、全世界的な宣教協力が不可欠」と展望した。また、新しい世紀は、技術宣教師や、専門職の働き人など多様な宣教師を必要としており、それもチームとして働く可能性が増えると指摘、そのために、宣教師を派遣する側の十分な備えが必要と訴えた。

例えばこの数十年、アジアからの宣教師が急増しているが、健康、子供の問題、団体とのトラブルなどで働きの平均寿命は短くなっている。個々の問題に、送り出す側の課題があるという。サポート体制でも、従来の多額の援助で宣教師を送り出すという西洋的考えから脱皮して、アジアなどでは、少額の援助で現地の伝道者を支えることもできるという発想の転換が必要だという。

今回のセミナーでは、世界宣教の現状について、インドネシア宣教師訓練センター所長のグレゴリー・ペック氏が講演、六十億の世界人口を民族で分類すると二万四千民族となり、そのうち一万一千の民族にまだ福音は届けられておらず、その未伝地の焦点はイスラムであると分析した。従来、イスラムと言えば禁教国とのイメージが強いが、ペック氏は「禁教国」とは言わず「CAN（Creative Access Nations）＝できる＝と言おう」と提唱した。それは宣教は神の働きであるからだという。そして我々が未伝地の人々のために祈ることこそ、神の第一の願いであると訴えた。また、異文化伝道に関する講演で、ペック氏は「異文化伝道とは愛であり仕えることである。それは滅び行く魂のために涙を流されたイエスの心を我々が持つことである」と語り、参加者に献身の招きをした。

分科会でペック氏（左2人目）を囲む参加者

セミナー後半のプログラムで中国宣教について講演したビクター・チェン氏は、元中国家の教会の責任者の一人。今はアメリカ在住の伝道者として活動しているが、その獄中生活の体験から、中国の教会の成長の秘訣を語った。

強制が学校を崩壊させる

行事以外でも硬直化

「『日の丸・君が代』の強制に反対するキリスト者教師・生徒・市民のネットワーク」の神奈川ブロック第一回集会が六月三十日、横浜市西区の日基教団・横浜教会で行われた。

同ネットワークは昨夏、「国旗・国歌法」の成立を受けて、キリスト者の公立学校教員らの呼びかけで結成。入学式・卒業式における「日の丸掲揚」「君が代斉唱」の強制が学校教育の現場に与える影響、強制

福岡にもVIPクラブ

8月に準備集会

聖書を軸に専門職同士の交流の輪を通してビジネマン伝道の可能性を大きく広げている会員制クラブ「インターナショナルVIPクラブ」を福岡にもと、しようと、有志らが動いている。その準備と呼びかを兼ねた「講演&お食事タベ」が八月二十四日、六時三十分から、福岡市中央区の西鉄グランドホテルで開かれる。元カネボウ品㈱社長・会長で現顧問の三谷康人氏（V

流刑キリシタン

オタア・ジュ

神津島地震